

英文法知識に基づいた

フランス語文法学習の有効性について

Est-il efficace d'enseigner la grammaire du français en profitant de la connaissance de celle de l'anglais?

廣田 大地

HIROTA Daichi

Université de Kobe

hirotadaichi@ruby.kobe-u.ac.jp

0. はじめに

近年、国際社会の共通言語としての英語という認識が世界的に定着し、それに伴い、大学を含めた日本の教育機関においても英語教育が以前に増して重視されるようになってきている。そのような状況の中、主に大学の一年生を対象として行われている初修フランス語教育は、その方針を大きく変えることを迫られているだろう。武内氏が指摘するように、これまで「反英語」の態度をとってきたフランス本国さえもが、グローバル化の影響を受け、英語による高等教育を取り入れるようになった今、日本の大学でのフランス語教育においても、共通語としての英語の重要性を受け入れた上での新たな教授法を確立することが急務であると考えられる¹。また、変革の必要性はそのような外圧によるものだけではない。例えば、昨今注目されている CEFR（ヨーロッパ言語共通参照枠）が提示している「複言語主義」の観点においても、中学校で第二外国語を新たに学習する際、既に学習した第一外国語との関係を考慮しつつカリキュラムを作成することが有効であるとみなされている²。より良いフランス語教育のありかたを追求する上で、多くの日本人にとっての既習外国語である英語の知識をどのように活用するかは積極的に取り組む価値のある課題であるように思われる。

1. 授業実践の概要

そのような背景のもと、執筆者は勤務校である神戸大学で 2013 年度に担当した初級フランス語クラスにおいて、英文法の知識に基づいたフランス文法教授法の開発と実践に取り組んだ。授業で用いた教科書は、そのような英仏の比較を取り入れ

¹ 武内英公子「グローバル化した世界におけるフランス語教育とは」, *Rencontre* (27), 2013, pp. 45-49.

² 「第二外国語（小学校で教えていない FL2）もまったくゼロから始めるわけではない。FL1 を基盤にし、また FL1 との関係で小学校で身につけたことをここでも考慮に入れながら、同時に FL1 とは少し違う目標を目指す（例えば、産出的活動よりも理解活動を優先する）。」（『CEFR 日本語版』, 第 8 章「言語の多様性とカリキュラム」, 8.3.2 カリキュラムの実例, a) 実例 1. 中等教育前半, p. 185.）

Rencontres Pédagogiques du Kansai 2014

ていない一般的な教科書であるが、CALL 教室での授業という環境を生かし、PowerPoint による補足資料を作成し、授業時の解説スライドや、学生の復習用配布資料として用いた。また、教科書に挙げられているフランス語例文も極力逐語訳的な英訳を添えることで、フランス語の統語法についての理解を促した。

具体的な比較方法としては、be 動詞と être の直接法現在形の活用表の比較のような平易なものから、英語の仮定法現在とフランス語の接続法現在の比較のような高度なものまで、次の3段階を踏まえることを意識して指導を行った。

1	新しく学習するフランス語の文法項目が、既に学習したはずのどの英文法に対応するかを提示する。
2	英文法の復習も兼ねて、英仏の文法項目で共通する機能と形式を確認する。
3	英仏で異なる部分を明確にし、新規学習事項として認識する。

このようにシステマティックな文法指導を行う狙いは、主に次の2点である。まず、学生が既に構築しているはずの英文法の体系に重ね合わせるように、フランス語の文法体系を構築すること。また、英仏で共通の箇所は「英語と同じ」と認識させることで学習の負担を軽減し、その分、フランス語独自の部分に学習者の意識を集中させることで、新規学習事項としての定着率を高めることである³。

2. 学生アンケートの結果

2.1. 五段階評価

このような試みは執筆者にとっても実験的な性質が強く、一年間を通して継続的に行うべきかためられる点もあったが、毎回の授業最後に履修学生が提出するコメント用紙を読み続ける中で、学生の文法習熟度や文法学習に対するモチベーションの向上においては十分な効果があるように見受けられたため、一年間のカリキュラムを通して、英文法との比較によるフランス語学習を継続的なテーマとして授業を行うに至った。その上で、学年末に履修学生に対して幾つかのアンケートを行ったので、その結果を以下に記しておきたい。

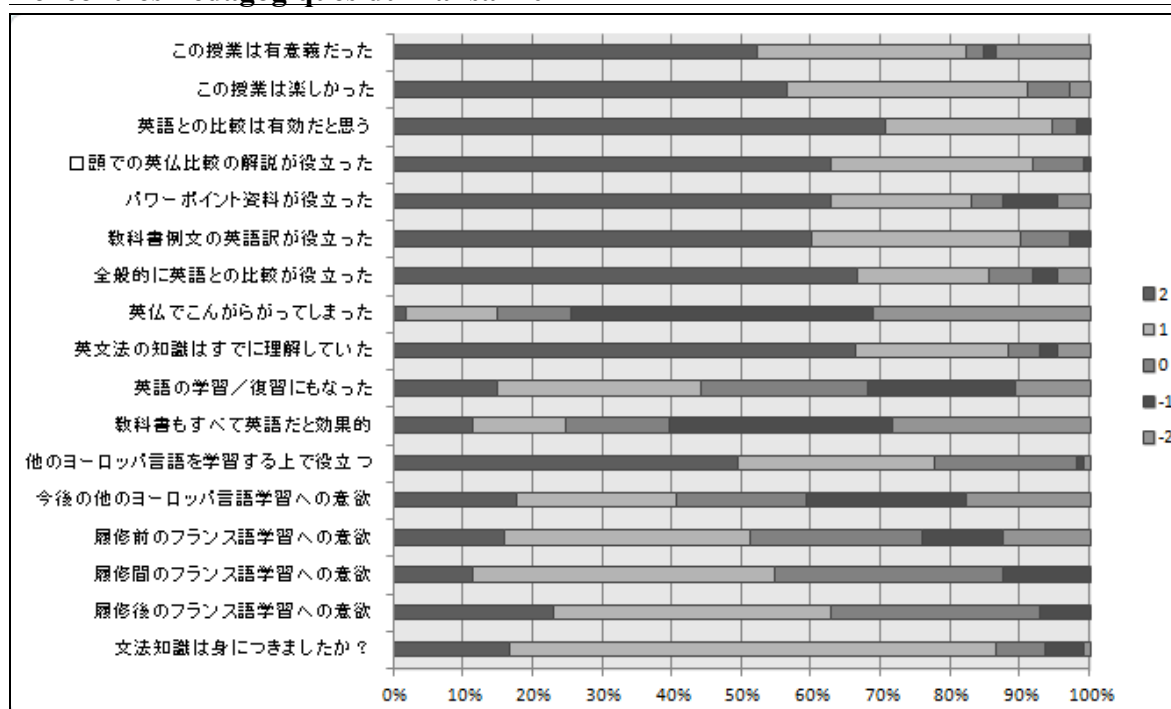
まず、受講生に対して、「英語との比較は有効だと思う」等、17項目の質問を、

+2	とてもそう思う
+1	ややそう思う
0	どちらとも言えない
-1	あまりそう思わない
-2	まったくそう思わない

というような+2から-2までの5段階評価で答えてもらい、以下のような結果を得た。

³ 神戸大学国際コミュニケーションセンター内の「神戸大学フランス語」ページにおいて、授業時に用いた PowerPoint ファイルをまとめたものを公開している。具体的な英仏文法の比較方法について関心がある方は、以下の url からダウンロードいただきたい。 <http://www.solac.kobe-u.ac.jp/france/>

Rencontres Pédagogiques du Kansai 2014



上記グラフ分布を見る限り、履修学生から授業方針に対して基本的には肯定的な評価を得ることが出来たといえるだろう。グラフの中で「英仏でこんがらがってしまった」の項目のみ、他の項目に対して逆転項目であるため、英仏文法比較をフランス語文法学習に取り入れる上で最も危惧される2言語間での混乱という現象も学生の主観ではあまり生じなかったようである。また、「英語の学習・復習になる」「教科書もすべて英語だと効果的」という2項目の評価があまり高くないことも注目に値するだろう。履修学生の印象としては、フランス語を学習する上で英文法を利用することは歓迎できるが、フランス語学習そのものを英語中心主義的な価値観で覆い尽くしてしまうことは、それほど望んでいないようである。現在、日本以上に英語教育に力を入れている韓国では、大学でのフランス語の授業を全て英語で行うという取り組みもなされているようではあるが、今後の日本の大学での第二外国語教育全般における第二外国語と英語との関係性を考えていく上で、上述の学生たちのアンケート結果は、興味深い反応であると言えるだろう。

2.2 自由記述設問1

また、上記の選択式の設問に加えて、自由記述形式で2つの質問を行った。一つ目は、「フランス語の文法項目の中で、英語との比較がもっとも効果的に感じた箇所を挙げて下さい」というものである。その結果を集計すると上位5項目として「1. 条件法、2. 半過去、3. 比較級、4. 非人称表現、5. 人称代名詞」が挙げられる。その他の項目についても、概ね英仏の文法比較は学習の助けになって良いとの意見が多かった。しかしながら、このアンケートとほぼ同時期に実施した後期期末試験の設問の一つとして、「特定の文法項目を1つ取り上げ、英語との類似点・相違点をそれぞれ説明しなさい。」という出題を行なったところ、例えば「英語で言う現在完了にあたるのが大過去」のような誤りが散見された。ただ単に英仏間で大きく異なる文法用語の把握のみが出来ていないだけという可能性もあるが、誤った

Rencontres Pédagogiques du Kansai 2014

文法項目同士を対応させてしまっている可能性も否定できない。そのため、今後の指導方法の改善点として、学年末の期末試験において英仏文法比較を学生に行わせるだけでなく、中間テストのような位置付けで、英仏比較の自由記述の設問を行い、誤った認識に対しては授業中にフィードバックの機会を設け、学生各自の気づきを促すようにすることが望ましいだろう。

また、英仏文法の比較を学生各自に行わせることで、基盤となるはずの英文法そのものについても極少数ではあるが、誤った認識を書いていることがあった。大学受験のための英文法学習や大学以降の実践的な英語学習を通してでは、なかなか気づくことが難しいそのような誤りを気づかせて、正しい知識を得ることも、大学における第二外国語教育ならではの役割と言えるのではないだろうか。

アンケートには他にも幾つか興味深い回答が得られたので以下に記しておく。

情報を整理しやすい。
[être の直接法現在に関して] 初めだったこともあり、英語の文章の組み立て方とフランス語の文章の組み立て方がリンクして感動したことを憶えている。
フランス語と日本語、英語の間では英語のほうが近いので、日本語訳を見るよりは英語訳を見るほうが対応関係を見つけるのがより簡単だったので、英訳が付いていることがうれしかった。
定冠詞とか文法用語で言われるより英語の the に当てはまるもの、など具体的な英語の単語のほうが分かりやすくて良かった。
英文法と同じ文法のところは新たに覚える必要がないので、英語との比較によりそうという点に気付いて勉強が効率化できたのでよかった。
比較というよりも、「この文法項目は英語でいえばこの項目ですよ。」というような説明が個人的に記憶に残りやすくて嬉しかった。

2.3. 自由記述設問 2

もう一つの自由記述形式の質問として、「実際には、日本におけるフランス語教育では、英語との比較による教育法はあまり行われていません。その理由は何だと思いますか？」という設問を置いた⁴。学生たちのコメントはあくまで推測によるものに過ぎないものの、現在の日本におけるフランス語教育と英語との関係性を的確に指摘しているように思われたため、あえてその幾つかを紹介しておこう。

フランス語を英語の概念で身につけるためには、英語の概念をしっかりと身につけている必要があるが、日本においては英語の概念がしっかり身に付いている人の割合が低いから。
学生の英語の理解度が低いとできないから。または、英語教育と同じ方法で良いだろうという指導者側の怠慢(?)があるからだと思います。2つ目の理由は憶測に過ぎませんが。
大学の授業におけるフランス語学習に関しては、高校までの英語の知識が身につけているかどうかは各大学・各学生によるのでなかなか導入しにくいのだと思う。

⁴ この設問自体、現在の日本におけるフランス語教育の在り方を一面的に回答者に提示してしまったことで、特定の方向性に回答を誘導してしまった可能性が否定できない。今後同様のアンケートを実施する上で改善していきたい。

Rencontres Pédagogiques du Kansai 2014

フランス語を教える側の人間はフランス語に誇りを持っているので、英語で教えた
くないのではないのでしょうか。

効果的な方法だと考えられていないから。フランス語教員が英語が得意でないか
ら。

生徒に英語を十分に理解していない人が多いからだと思います。また、フランス語
の先生の中でも、英語を忘れていて、英語力に自信がない方がいらっしゃると思
えられます。

3. 英仏文法比較の汎用性について

今年度の取り組みと、学生の成績、反応を考慮すると、神戸大学一年生を対象と
したフランス語文法教育においては、この方法は有効であると思われる。しかしな
がら、他大学を対象とした場合はどうだろうか。日本の大学教育の現状においては、
大学によっては英語の苦手な学生の逃げ道として、第二外国語教育が機能してい
るという側面もある。確かに、「主語」「述語」「目的語」「定冠詞 (the)」とは何かと
いった文法上の概念が確立されていない学生相手では、英文法との比較によるフ
ランス語文法学習は困難であるだろう。とはいえ、TOEIC で高得点を取得したり、
難関大学の二次試験英語に合格したりする実力が必要なわけでもない。初級フラン
ス語で学習する文法事項は、英文法に置き換えれば中学校での3年間プラス高校1
年間で学習する程度のものに過ぎない。日本の大学受験制度において、現状のよ
うにセンター試験英語が現実的な会話能力よりも英文法の細かな知識の理解を受
験生に要求している限り、そのような受験勉強をある程度経験してきた大学一年生
に対しては、英仏文法比較によるフランス語文法学習は有効であると考えられるだ
ろう。また、その点において、この手法は幾つかの私立高校で行われているフラン
ス語の授業において最も学習効果が上がるのかもしれない。

4. 今後の展望

英文法の知識に基づいたフランス語教授法は、教員個々人の現場での指導の中
では様々な取り組みがなされてきたであろうが、少なくとも日本のフランス語教育学
研究として体系的に研究されることはあまりなかったように思われる。執筆者自身、
まだ本格的な実践を始めて一年しか経ていないため、今後も実践と理論の両面にお
いて研究を深めつつ、同じような教育方法を実践しているフランス語教員と情報交
換を行う中で、より効果的な教授法の研究に努めていきたい。